

第4回NINJALフォーラム

日本語文字・表記の難しさとおもしろさ

日時 平成23年9月11日(日) 13:00~17:00
会場 一橋記念講堂(学術総合センター)
主催 人間文化研究機構 国立国語研究所

プログラム

13:00- 開会挨拶 影山 太郎(国立国語研究所長)

13:05- 基調講演

「漢字とどうつきあうか」 阿辻 哲次

(13:55-14:05 休憩)

14:05- 報告1

「「自由度」こそ日本漢字の魅力」 小駒 勝美

報告2

「放送と漢字」 柴田 実

報告3

「文字の認知単位」 横山 詔一

(15:05-15:15 休憩)

15:15- 報告4

「学校における表記の非日常性」 棚橋 尚子

報告5

「漢字:その魅力にひそむエンドレス感」 シュテファン・カイザー

(15:55-16:10 休憩)

16:10- 質疑応答・討論

16:55- 閉会挨拶 横山 詔一(国立国語研究所研究情報資料センター長)

司会: 高田 智和(国立国語研究所准教授)

講師紹介



阿辻哲次 (あつじ てつじ)

京都大学大学院教授。専門は中国文化史、中国文字学。文化審議会国語分科会漢字小委員会委員として、常用漢字表の改定に携わる。著書に『戦後日本漢字史』(新潮選書、2010年)、『漢字道楽』(講談社学術文庫、2008年)、『漢字のはなし』(岩波ジュニア新書、2003年)など。



小駒勝美 (ここま かつみ)

新潮社校閲部副参事。日本語を読むための漢字辞典『新潮日本語漢字辞典』(新潮社、2007年)を企画、執筆、編纂した。著書に『漢字は日本語である』(新潮新書、2008年)。



柴田実 (しばた みのる)

NHK 放送文化研究所専門研究員。1970年NHK入局当時はアナウンサーとしてテレビ・ラジオを担当。1996年からNHK放送文化研究所で、放送用語の調査・研究を担当。著書に『ふるさと日本のことば(1~6)』(監修、学習研究社、2005年)、『新版・NHKアナウンスセミナー』(共著、日本放送出版協会、2005年)ほか。



横山詔一 (よこやま しょういち)

国立国語研究所教授。著書に、『表記と記憶(心理学モノグラフNo.26)』(日本心理学会、1997年)、『記憶・思考・脳』(共著、新曜社、2007年)、『新聞電子メディアの漢字』(共編著、三省堂、1998)、『現代日本の異体字—漢字環境学序説』(共著、三省堂、2003年)ほか。



棚橋尚子 (たなはし ひさこ)

奈良教育大学教育学部教授。10年間の小・中学校教諭経験を経て大学勤務に。論文に、「漢字習得におけるルビの有効性の解明」(『国文—研究と教育—』30号、奈良教育大学国文学会、2007年)、「教科に特徴的な漢字に関する考察—他教科における漢字指導の可能性—」(『国語科教育』67号、全国大学国語教育学会、2009年)ほか。



シュテファン カイザー (Stefan KAISER)

國學院大學文学部教授。著書に、『Teach Yourself Japanese』(Hodder & Stoughton、2003年)、『Japanese: A Comprehensive Grammar』(共著、London/New York: Routledge、2000年)、『The Western Rediscovery of the Japanese Language. 8 Vols.』(編著、London: Curzon Press、1994年)ほか。

漢字とどうつきあうか

阿辻 哲次

コンピュータ時代の漢字文化

(京都新聞「現代のことば」2001年5月、阿辻哲次)

漢字は日本の進歩をさまたげる諸悪の根源だ、という論調がかつての日本には存在した。戦後の国字改革と漢字制限の背景には、「遅れた文字」である漢字をできるだけ使わないようにしようという認識があった。それが近頃では漢字廃止論はもちろん、使える漢字の種類を制限しようとする議論さえ聞かれなくなってしまう。いったいなぜなのだろう。

もともと漢字廃止・制限論の論拠のひとつとして、漢字は機械で処理できない、という事実があった。欧米にはタイプライターという便利な文房具があって、文書を迅速にかつ美しく作成することができた。しかし漢字仮名まじり文の日本語を機械で書くことは不可能だったし、それでは近代社会の達成はとうてい望めない。だから漢字を使うことを考え直そうという議論が、かつてビジネス界を中心に真剣におこなわれた。

しかしやがて技術が進歩し、今ではコンピュータが6千以上もの漢字を処理できるようになった。また急激な低価格化とともに、パソコンがオフィスのみならず、家庭内にまで浸透するようになった。

パソコンとワープロソフトを使うと、いともたやすく漢字を書ける。一所懸命に勉強して漢字を覚えた世代からは、こんな機械で書いた文字には心がこもっていないとか、ワープロばかり使っていると手書きで漢字が書けなくなる、という苦言が呈せられることもあるが、要は新しい文房具の登場なのである。かつての毛筆からペン書きに移行しだした頃には、きっと毛筆派からペン書きに対する苦言が呈せられたことだろう。

今では小学校でもコンピュータを使っただけの授業がおこなわれているから、パソコンで文章を書く人がこれからますます増えていくだろう。しかしこれから先の社会に問題がまったくないバラ色の世界である、というわけではもちろんない。

ある学生がワープロでレポートを書いている、「森鷗外」の「鷗」がどうしても「鷗」になってしまうと困っていた。もちろん「鷗」が正しい字形なのだが、常用漢字では「區」を「区」と書くために、それにつれて「鷗」も「鷗」と書かれることが多くなった。しかし明治の文豪の名前はやはり正しく「鷗外」と書きたい、とその学生は考えた。

これは日本工業規格、いわゆる「J I S」で表示されている形のせいであり、1978年に制定されたJ I S漢字コードで「鷗」と表示されていたのを、83年のJ I S改定で「鷗」に改めたことから、それ以後「鷗」がコンピュータで使えなくなった。今のパソコンでは常用漢字の3倍以上にあたる約6千3百の漢字が使え、たいていの漢字はこの中に含まれている。だがもし必要な漢字がJ I S規格に入っていないければでは、手書きとはちがって絶対に書けない。J I Sに入っている漢字でしか文章が書けないようになってしまったら、まさに一大事である。

パソコンやワープロを使うことで、それまで敬遠していた漢字に親近感を覚えたという人は非常に多い。しかしパソコンで書いた文章には不必要なまでに漢字が多く使われるというのも、間違いない事実である。

機械で書かれる日本語をめぐっては、すでにあちらこちらで論じられてきた。しかしそれはつまるところ、もっとも重要なのは、文章とは自分で書くもので、機械が書いてくれるものではない、という当たり前の事実に戻結するだろう。日本語の表記に関して今もっとも強く要求されているのは、文章を書く者自身の言語的主体性の確立なのである。

「自由度」こそ日本漢字の魅力

小駒 勝美

日本語の文字表記には一定した読みが無い

「昨日私は刑事に脅かされた」

「きのうわたしはけいじにおどかされた」と読むのが普通だと思うが、

「さくじつわたくしはでかにおびやかされた」と読むこともできる。日本語では、漢字表記に対する読み方が一対一対応していない。

日本語には正書法が無い

「サトクンワネコガダイスキダ」という日本語の文はたとえば以下のように書くことができる。

「佐藤君は猫が大好きだ」

「サトーくんは、ねこが、だい好きだ」

「さとう君は、大すきだ」

このように日本語には一定した正書法が存在しない。

校閲という仕事

私は新潮社という出版社で校閲の仕事をしている。

校閲という作業では、著者に問い合わせずに直すことができるのは全く間違っている「文字の誤り」だけである。あとはすべて鉛筆による疑問の形で解決してもらう。

文字の校閲：一般書の出版の場合、常用漢字の制限はない。常用漢字表にある字は常用漢字表の字体に従う。表外字の場合は正字を使用。著者が意図すれば、過去に全く存在しなかった漢字を使用することも可能である。

内容の校閲：有名作家の小説であった実例。大文字山から京都の市街にいる知り合いを見つけて手を振った。すると気がついて相手が手を振り返した。こんなことはできるわけがない。修正するか、目をつぶってそのままにするか、判断を仰ぐ。

日本漢字の特色

1 使用文字

1-1 国字

鱈(きす)、鰯(わかさぎ)などが国字と言われている。しかし「鰯」は、中国の漢字辞典に出ているので、厳密にいうと国字ではない。

1-2 日本独自の異体字

第の字の異体字は中国での用例は見つかっていない。学校では教えないが、一般に広く使われていて誰もが知っている。

1-3 日本独自の使い方

「制水弁」東京都が戦後に作った小型のマンホール（ハンドホールというらしい）に書かれていた文字。我が家の近く（板橋区南町）の路上に現存する。「弁」の字は、漢和辞典類では「エン」と読み、覆う、深いなどの意しかない。戦前版の平凡社『大百科事典』の索引「ベン」の欄にこの字があり、本文には「ヴァルヴ」の漢字表記として出ていた。これは日本で作った「弁（瓣）」の異体字と思われるが、従来の漢和辞典類には全く出ていない。こうした字を知るために私は『新潮日本語漢字辞典』を作った。

2 読み

2-1 訓読

訓読はかつて朝鮮半島にもあったらしいが、現在使用しているのは日本だけ。「生」には常用漢字表に二種類の音読と十種類の訓読が示されている。

2-2 3種の字音

漢音、呉音、唐音の三種を使い分けている。

2-3 送り仮名

常用漢字には、送り仮名の決まりが存在するが、実際の書物では「すくない」を「少ない」と書いても「少い」と書いても自由である。

2-4 熟字訓

「生命」を「いのち」と、「義父」を「ちち」と、「運命」を「さだめ」と読むのも一種の熟字訓である。

2-5 振り仮名

一般に定まった振り仮名も多いが、新たな振り仮名を考案して振ることが可能である。

日本語の表記法には、近代化以前のさまざまな要素が残っている。この自由度こそが日本語の表記の最大の特徴である。

日本人は漢字が好きである。テレビのクイズ番組には漢字を使った様々な問題が出題され、視聴率を稼いでいる。理科系の問題がほとんどクイズに出題されないのと好対照であり、日本人の嗜好をよくあらわしている。

放送と漢字

柴田 実

1. テレビで使う漢字・使えない漢字

テレビで使う漢字は、国の常用漢字表の考えとほぼ同一。

これは、当用漢字時代から、新聞各社と同じ歩調をとる（新聞協会用語懇談会）。

テレビの特性

横書きが主

文字数に制限がある（新聞も同様）約13～21文字

文字フォントは、丸ゴシックが中心

固有名詞が多い（ふりがなは義務づけていない）

限られた時間だけ表示

画面は走査線で構成（画数が多い漢字は読みにくい）

2. 画面の文字の歴史

はじめは手書き文字

写真植字（1画面1枚の紙素材）

洋画の字幕（邦画は無声映画時代だけ）（漢字文化の衰退とほぼ同時期）

電子文字発生（動き、色が付け加えやすくなる）

1990年代のコンピューターの進化から

字幕放送の発生（電波の隙間を利用）

3. 画面の文字は使い方が変わった

変遷とその理由

生放送から収録へ（プリプロダクトからポストプロダクトへ）

画面効果

聴覚障害への配慮（生活の多忙化、ザッピング視聴）

テレビ画面のコミック雑誌化

情報量の増加（話し言葉＋書き言葉）

強制された（トップダウンの）漢字政策ではなく、枠内での現場の個々の改良

4. どのような文字が使われるか

「常用漢字」の中でも使われる回数が少ないものも多い

固有名詞が多い

5. 常用漢字改定とマスコミの考え

交ぜ書きの回避

報道文章の確立と報道ジャンルの多様化

二つの考え

○易しい日本語で漢字が少ない文章

○漢字が多く難解でも、正確で伝統的な日本語

「一般の社会生活における漢字使用を考えるとときには『コミュニケーションの手段としての漢字使用』という観点が極めて重要」(常用漢字表答申「基本的な考え方」)

一方で、常用漢字表は「漢字使用の目安」

マスコミ界としては、ほぼ満足だが、難しすぎたり、表外でも使いたかったりするものがある

NHKが独自に使っている表外字

絆・疹・胚・炒(める)・肛・諜・挽・禄

新聞各社も使っている表外字

磯・哨・鶉・鷄(とり)・虹(コウ)・証(あかす)

常用漢字にあっても使わない漢字

虞・且・遵・但・朕・附・又

6. 技術の進歩とテレビの文字

紙や土以外の映像の発生

「人の手で書く」という制限がなくなる

読める漢字と、書ける漢字の難度の違い

ハードウェアに依存する文字のあり方が今までになく意識される時代

7. 画面の文字の将来

放送と日常電子機器の類似点

- ・「電子画面」に表示される
- ・消える存在
- ・表示する「表面」は個人では作れない
- ・内容(ソフトウェア)は膨大な個人の手による
- ・「もの(本)」と内容の分離
- ・立体画像・・・立体漢字も？

文字の認知単位

横山 詔一

私たちが文字を読むとき、心の中ではどのようなことが起きているのでしょうか？人間の心の眼は、文字を一つずつバラバラに読んでいるのではなく、意味を持つまとまり（単位）である「語」の一部として読もうとすることが多いようです。また、文字の形を心のなかで思い浮かべようとする、なぜか無意識のうちに指が動いてしまうこともあります。文字生活のさまざまな場面で出会う事例をもとに、「読み書きの生態系」を支える根源的なメカニズムについて考えてみましょう。

1. 文字を読む

(1) 読みまちがい

同僚にパソコンのパスワードを教えてくださいました。紙切れに「1rl5」と手で横書きされていたので、その通りに入力したつもりですが、受け付けてもらえません。アルファベットの「L」か、それとも数字の「1」か、まぎらわしいのです。大文字で表記すると「1・R・L・5」、「L・R・1・5」、「1・R・1・5」など、いくつかの可能性が考えられます。SF小説で世界的に有名なアイザック・アシモフは、アルファベットと数字のこのような多義性（あいまい性）に着目した推理小説を書いています（『三つの数字』『黒後家蜘蛛の会』2、創元推理文庫、1978）。

カタカナも読みまちがいの例が多くあります。外国人の日本語学習者が日本に来た当初、バスなどの「出口、降り口」の表示を「出ろ、降りろ」だと思っていたという話を聞いたことがあります。日本語を母語とする人でもカタカナを認知することは、簡単なようで実は複雑な側面を含んでいます。たとえば「ツ」と「シ」を別の字と見るか、同じ字と判断するかは、かなり微細なパターンの違いに注意を向けて、両者を区別する必要があります。そのほかにも、「ソ」と「ン」と「リ」など、カタカナには混同しがちな文字群が存在します。中学生が地図会社の「ゼンリン（ぜんりん）」（ZENRIN）を「ゼリソン（ぜりそん）」と読みまちがえた場面を目撃した経験があります。

(2) 他人の空似

漢字には字形は極めて類似しているが、実は別字である文字群が存在します。これを「同形・類形異字」といいます。図1に示す「かき」と「こけら」は、字形は極めて類似しているものの、発生が全く異なる別の文字です。漢字の辞書では、弁似（べんじ）という項目を設け、このような他人の空似の例を挙げて、使用に際して注意をうながしています（日本規格協会・国立国語研究所・情報処理学会、2006）。漢字の専門家であっても、図1の文字を一文字単独で呈示された場合は、それが「かき」なのか「こけら」なのかを同定（認知）できません。画数に違いがあると指摘したところで、このような微差はノイズと区別できないからです。

柿 かき, シ (木部 5画)	柿 こけら, ハイ (木部 4画)
------------------------	--------------------------

図1 同形・類形異字の例

文字の認知単位を「文字認知に役立つモノサシの目盛り」のようなものだと考えるならば、その目盛りは個々の文字の側には消極的な形でしか刻印されていない、という逆説に直面します。文字の正確な認知には前後の文脈が必要であり、文字単独では成立しないとも言えるでしょう。

「柿」の例は特殊すぎる、例えば「犬」はどう見ても「犬（いぬ、ケン）」としか読めないだろう、

という声が聞こえてきそうですが、本当にそうなのでしょうか？「犬」と見える字は「大」に何かの事情でシミが付いたのかもしれないし、逆に「大」と見える字は「犬」や「太」のテンがかすれただけで「大」ではない可能性もあるでしょう。土佐犬や秋田犬といった文脈に埋め込まれると、その時点で初めて三文字目の「犬」は「大や太ではない」と確定できます。文字同定・認知において、専門家も一般人も、この点に違いはありません。それぞれの文字のなかに、文字認知に役立つモノサシの目盛りのようなものが固く刻印されていて、その目盛りは消えもしなければ変化もしない、というのは幻想かもしれません。

2. 文字を思い浮かべる

漢字の足し算クイズをやってみましょう。「黄」と「木」を組み合わせると「横」になります。では、「月」と「糸」と「口」を組み合わせると何になるのでしょうか？「口」と「十」と「共」からは何ができるのでしょうか？(正解は絹と異)このような問題を日本人や中国人など漢字文化圏の人に与え、その時の行動を観察すると、ほとんどの人が、空中や手のひらの上などに指先で字を書くような動作をおこないます。これを「空書(くうしょ)」と呼びます。漢字の足し算は、漢字の文字イメージを心の中で組み合わせて統合する必要があります。文字イメージを心の中で組み合わせるとき、無意識のうちに自動的に指先が動いてしまうのです。さらに興味深いことに、空書を禁止して問題を解かせるると、成績が悪くなることが報告されています(佐々木正人・渡辺 章, 1984)。

この現象は英単語でも生じます。「英単語のフラワーのスペルを口で言ってください」というような問題を日本人大学生に出すと、約80%の人に空書が観察されます。空書を禁止すると、漢字の場合と同じく成績が悪くなります。一方、欧米人大学生は空書をほとんどしません。空書をさせると注意の集中が妨害されるようで、かえって成績が低下するのです(佐々木・渡辺, 1984)。

以上のような結果から、漢字文化圏の人は、漢字や英単語の形を思い浮かべるときに、視覚イメージだけではなく、カラダ(身体)の動きという運動感覚成分の単位・まとまりもあわせて活用していると考えられます。漢字や英単語を手で書いて学んだ経験が影響しているという説もあります。ちなみに、失語症の一種に純粋失読という病気があり、視力は十分なのに文字が読めなくなるのですが、文字を指で「なぞる」と読める確率が格段に向上することが世界中で報告されています。古文書の専門家が「くずし字」を読み解く際にも、同じような経験をすることがあると聞きます。

3. 文字を選ぶ

パソコンや携帯メールで「ひのき」を漢字変換したところ、「桧-檜」の二つの候補が出てきます。あなたはどちらの字を選びますか？「会-會」の場合はどうでしょうか？このような字体の好みに関するデータを収集する目的で全国約12万人から20歳代、30歳代、40歳代、50歳代の女性480名をランダム抽出し、Web画面で異体字ペアを提示して調査をおこないました(横山詔一, 2004)。

その結果、20歳代は、「桧」を選んだ割合が32%で「檜」は68%でした。また、「会」は99%で「會」は1%でした。これは意外な結果です。「桧-檜」ペアの差異は「木」を除いた「会-會」にあるので、「会-會」のデータから「桧-檜」の選択傾向を予測できそうな気がしたのですが、そうではありませんでした。人気がある「会」を要素とする「桧」よりも、人気がない「會」を要素とする「檜」の方が好まれるのです。このことから、文字の認知は、部分要素という単位の足し算によって成立するわけではないことがわかります。心の眼は、文字全体のまとまり・カタマリから意味や音(読み)の情報をつかまえようとしているのでしょう。

学校における表記の非日常性

棚橋 尚子

一. 文字の習得時期における非日常的な表記

文字の習得は小学校第一学年での平仮名(片仮名)習得、その後学年別配当漢字(中学校修了時まで)、常用漢字(原則は中学校で「読み」、高等学校で「書き」と習得する。ローマ字は小学校第三学年で習得する。

表記については小学校の間に長音、拗音などの特殊音節の書き方や、句読点、かぎ、漢字仮名交じり表記への意識付けなどの基本的な事項を押さえ、中高での表現・理解活動につなげていく。

① 小学校低学年教科書の文節分かち書き

漢字習得量の少ない小学校低学年教科書では、教科書表記は「文節分かち書き」となる。語句の切れ目を際立たせるためであるが、国語で音読したりする場合、読点への意識が低くなる傾向がある。

② 交ぜ書きと振り仮名

学年別漢字配当表に縛られる小学校の漢字表記は、教科書、板書とも交ぜ書きや振り仮名を使用する率が高くなる。近年は学習指導要領で振り仮名の提示が容認されたこともあって交ぜ書きを回避する傾向があり、振り仮名使用語句が増えている。また、教科書によっても交ぜ書きの使用傾向は異なる。社会科学(歴史的分野)における固有名詞は当然漢字での提示になるが、専門用語や児童の認識率の低い語は漢字表記される傾向にある。

③ 原典との表記差(長音符号など)

漢字、平仮名表記については学年別漢字配当表に基づき変更されるため、原典との異なりが起きる。そのほか小学校では、長音符号の扱いなど一般的な日常の表記とは異なり、平仮名表記においてはいわゆる「棒引き」を回避する。また、句読点や「！」などの符号にも異同がある。

④ 片仮名の表記

片仮名は、平仮名の習得後に教科書提示が始まる。しかし、日常生活において片仮名語は非常に多く、片仮名未習時における板書などでは困ることがある。基本的には平仮名表記することになるが、特に長音を書く場合、悩ましい事態が起こる。「のうと」か「のおと」か「のーと」か、などがそれである。

二. 縦書きから横書きに変化した社会科教科書の表記を通して

① 歴史的事象と数字表記の関係

現在小学校の教科書は概ねB五版である。社会科は一九九二(平成四)年の改訂時にA五版からB五版となり、その際に各社とも従前の縦書きから横書きに表記が変化した。その結果、歴史的対象名に数字が入る「十七条の憲法」(社によっては「冠位十二階」も)は、教科書会社によって漢数字を使うか、算用数字を使うかで表記が分かれることとなった。

② 教科で異なる数の書き方

算数では、横書きであることが重視され、熟字訓である「一人」なども「1人」という表記になる。このような事態を受け、さらに、縦書きで書くことが少なくなったことも手伝い、大学でのレポートなどを縦書きにさせると算用数字を使う学生が多いという実態がある。

三. 表記よりも「字形重視」の教育現場

① 字形に「こだわる」教師

小学校においては、表記について取り立てて学習をする現状がある一方で、文字の習得過程にある実情から、文字(漢字)指導、特に字形指導が重視される傾向にある。教師に常用漢字表の前書きを目にするといった経験も少ないのだと思うが、棚橋が一九九八年に実施した意識調査によれば、回答した教師の九割以上が「とめ」「はね」といった字形細部にこだわって漢字テストの採点することが分かった。将来のため、高校入試のためということであるが、漢字嫌いの児童を生み出さないか心配が残る。

② 教科書の字体差が教育に及ぼす影響

教師にとって、漢字字形のよりどころは「教科書の字形」である。しかし、各教科書会社のフォントは当然のことだが微妙に異なっており、それに関する教員や保護者からの問い合わせが少なくないと聞く。「漢字とはなにか」などの根本的な理解が教師(または保護者)には必要である。

四. 教育における表記をどう考えるか

① 振り仮名をめぐって

戦前は忌避され気味であった「振り仮名」も昨今は肯定的にとらえられるようになった。棚橋の二〇〇六年の調査によれば振り仮名は漢字の読み書きの促進に有効であり、積極的に使うべきだと考える。しかし、これはそれこそ表記における「非日常性」を担保することかもしれない。

② これからの表記指導をどう考えるか

表記の指導は、標準的な表記の習得が基盤ではあるが、多くの表現事例(日常的な表記)に触れさせ、書き手の表現意識や表記から受ける印象などを重視する意識を育てていくことが肝要である。

漢字：その魅力にひそむエンドレス感

シュテファン カイザー

1 魅力とその副産物

1-1 魅力：漢字教材の形容辞

異国風で異質、絵文字、優れている、夢中(狂?)、すばらしい… (cf. 漢字タトゥ、など)

1-2 漢字神話 (文献7)

Ideographic (表意)、Universality (普遍性)、Emulatability (模範とすべき)、Monosyllabic (単音節)、Indispensability (不可欠)、Successfulness (成功済み)

2 学習者にとっての日本語と漢字：授業・学習時間のデータ

2-1 米国国務省付属外務研修所

類型	言語例	授業時間	週間
I	ロマンス・スカンディナビア・ゲルマン言語など	575-600	23-24
II	フィンランド、ヘブル、ロシア、トルコ語など	1100	44
III	中国、日本、コリア、アラブ語	2200	88

(ILR スケールのレベル S-3, R-3 「一般実務レベル」に到達するための授業時間数)

2-2 日本語能力試験

レベル	漢字数	基準学習時間数	漢字圏実績	漢字圏外実績
4級	150	150時間程度	200-300	250-400
3級	300	300時間程度	375-475	500-750
2級	1000	1000時間程度	1100-1500	1400-2000
1級	2000	2000時間程度	1800-2300	3100-4500

(日本語教育センター、JLEC、92.10-2010.10 データ)

2-3 日本人児童 (データ欠如により敢て孫引き)

	日本	イギリス
小学校における国語の授業時間数 (時間/週)	11.3	8
全授業時間数に占める割合 (%)	44	31
覚える異なり単語の総数	8900	48000
100の漢字(漢字)・単語(英)を教えるのにかかる時間数(分)	268	36

(文献2、文献6引用による)

2-4 目玉、いくつ足りない?

われわれ漢字を使用する人間ときたら、残念なことに、蒼頡のような四つ目ではない。つ

まり、「目玉が二つ足りない」……漢字という、本来はとてつもなく偉大なはずの発明品を、まっとうに使いこなすことができず、むしろこれを持てあまし、その管理と保全とに、多大な苦勞を強いられてきたのである。(文献3)

3 漢字の規則性程度の整理

3-1 音符との「一致度」(文献4)

1.0=57.6%、0.75=18.3%、0.5=09.4%、0.25=05.0%、0.0=09.7%

…母音の不一致、清音と濁音の対立、直音と拗音の対立などについては、音符から全体の音への類推が付きやすそうに見える。しかし、その他のばあいは、音素1個の相違といっても、かなり、くいちがっている印象をうける。…0.5%以下のばあいには、音符の効果は、ほとんどないといっても、よいだろう。(文献4: 310-311)

3-2 文献5による計算しなおし: 完全一致 57.6%、ある程度一致 32.7%、全く不一致 9.7%

3-3 より厳格な方法(文献14)による「表音性」計算: 最大で17%

4 非漢字圏の学習法 (Heisig Vol. 1, 2 を例に)

4-1 文献9

Part 1、既成のストーリーによる基本的な部品 (primitives) と、その部品からなる漢字を扱う; Part 2、長めのストーリーではなく、もっと端的な「筋」(plot) による結びつけに移行 (利用者、自前でストーリー); Part 3、部品の組み合わせにまつわるストーリーなどを利用者任せ。

121 utensil

器

この漢字の情景は快いものではない。大きくてふわふわしたセントバーナード犬 (*St. Bernard dog*) がテーブルの上に伸びきった状態で横たわっている。蒸し上がっていて、野菜で詰め物にされたり、飾られたりしていて、脚が上を向いて、口にリンゴをくわえている。テーブルの各コーナーにはどん欲で空いた口 (*mouth*) が、器 (*utensils*) がもたされ宴会が始まるのを待っている。

122 stinking

臭

この字は動物世界にはもう少しやさしい。我が友のセントバーナード (*St. Bernard*) が健在で、鼻 (*nose*) が疑い深くどこかにある臭い (*stinking*) ものをびくびくと探しあてようとしている。

277 road-way

道

キーワードは通過するための道路 (*road*) と何かをするための道または方法 (*way*) という意味をもっているが、前者の方がイメージを作るのにより適している。部品は「道路の首」(*the neck of a road*) と読まれる。交通が止まってしまった、込み合った車道 (*road-way*)

を想像しなさい。我々が通常”*bottle neck*”と呼ぶ状況。

469 song

歌

この漢字の歌 (**song**) はカンカン(*can-can*)ガールのコーラスラインが歌っている。聴衆にあくびしか反応させない理由については、あなたにお任せしよう。

575 the following

翌

Feathers... vase. Be sure to contrast the connotation of this keyword with that for **next** (FRAME 471). (次、**next**, *lack of ice*) 竝、**stand up**, *vase*)

4-2 イメージ化

... (次の) 課題は混合漢字を作り上げる事だ。想像力と記憶がものをいうのはこのところだ。目標は、精神の目にショックを与えたり、むかつかせたり、魅惑させたり、からかったり、あらゆる方法でおもしろがらせることによって、キーワードと密接に結びついたイメージを焼き付ける点にある。

245 cow

牛

この漢字を、ロードローラーにひかれたばかりの牛 (**cow**) の落書きと見立てたらどうか。最初の一画の小さい点が片側に回った頭で、次の二画が四本の脚。

4-3 文献 10

Part One, Chinese Readings

Ch. 1 The Kana and their Kanji a、二、三、女...、b、計、毛、礼...

Ch. 2 Pure Groups A、4字以上、中、忠、沖(冲天)、B、3字以下、C、2字以下

Ch. 3 One-Time Chinese Readings 厶、米、別、没、白(黒白) ...

Ch. 4 Characters with No Chinese Readings (in this book) 結、旭、亘、只、貝、頁...

Ch. 5 Semi-Pure Groups 次(次第)、姿、資、諮/盗; 交、校、効、郊、絞/較...

Ch. 6 Readings from Everyday Words 三画、元(気) ...

Ch. 7 Mixed Groups

A. Mixed Groups of 2 Readings Only 同、銅、胴、洞(洞察); 筒(水筒)、桐(桐油)

...

B. Mixed Groups with 2 Exceptions Only 女(女性、性分)、星(星座、明星) ...

C. Remaining Mixed Groups (地図、地震、=Everyday Words)

Ch.8 Readings from Useful Compounds (土(土地)(土曜日、=Everyday Words))

Ch. 9 A Potpourri of Readings 弱肉強食、微笑...恐妻...鯨(鯨飲馬食) ...

Ch. 10 Supplementary Readings

A. Common Supplementary Readings (右(左右)(右翼、=Useful Compounds)、欄、裏、猶)

B. Uncommon Supplementary Readings (謀(謀反)(陰謀、=Semi-Pure Groups))

Part Two, Japanese Readings

Primary Phonemes 亜井卯江尾蚊 mosquito 切(る) ...

Voiced Phonemes 画儀具下碁座...

Long Vowels (多(い) 凍(る) 背 通(る) 設(ける) タ...

Diphthongs 巨(人) 写(真) (洋) 酒 署(名) 茶 著(者) ...

5 「この字は覚えたけど」 症候群 =日本の漢字使用に起因するエンドレス感、「日」を例に

文献

- 1 島村直己 (2005) 第9章 国語教育と漢字 朝倉漢字講座 4
- 2 高田琴三郎 (1935) 文字を使う法 千倉書房 (山田尚勇、2004)
- 3 武田雅哉 (1994) 蒼韻たちの宴—漢字の神話とユートピア— 筑摩書房
- 4 野村雅昭・伊藤菊子(1978) 漢字の表音度 計量国語学 11-7: 306-311
- 5 林大監修(1982) 図説日本語—グラフで見ることばの姿— 角川書店
- 6 山田尚勇 (2004) 第1章 情報化社会と漢字 朝倉漢字講座 5
- 7 DeFrancis, J. (1984) *The Chinese Language: Fact and Fantasy*. University of Hawaii Press.
- 8 Foerster, A., Tamura, N. (1994) *Kanji ABC: A Systematic Approach to Japanese Characters*. Tuttle.
- 9 Heisig, J. D. (1977) *Remembering the Kanji Vol. I: a complete course on how not to forget the meaning and writing of Japanese characters*. Japan Publication Trading Co.
- 10 Heisig, J. D. (1987) *Remembering the Kanji Vol II: a systematic guide to reading the Japanese characters*. Japan Publication Trading Co.
- 11 Kanji Text Research Group, University of Tokyo (1993) *250 Essential Kanji for Everyday Use*. Tuttle.
- 12 Kushner, E. (2009) *Crazy for Kanji: A Student's Guide to the Wonderful World of Japanese Kanji*. Stone Bridge Press.
- 13 Rozin P., Poritsky S., Sotsky R. (1971) American children with reading problems can easily learn to read English represented by Chinese characters. *Science* 171:1264–1267.
- 14 Stalph, J. (1989) *Grundlagen einer Grammatik der sinojapanischen Schrift*. Wiesbaden: Harrassowitz.